



羅針盤

2015年度 第19号
都立豊多摩高等学校
進路図書部

Geistesaristokrat

2016 (平成28) 年2月17日発行

大学入試の小論文に、課題文を読んで書かせるタイプがある。慶應義塾大学が典型。的はずれの文章を書かないためには、正しく読みこなし、出題意図を見抜くことが必要である。文章の選択には、大学や学部個性が反映されるから、年度を越えた一貫性がある。過去に出題された書籍の通読が対策になろう。

2011年早稲田大学スポーツ科学部の場合は、**玉木正之**『スポーツとは何か』(講談社現代新書、1999年)の一節を示し、「次の文章を読み、『スポーツとは何か?』についてのあなたの考えとその理由について述べなさい」という問題であった。

課題文は、現代における各種スポーツの氾濫^{はんらん}や暴走を嘆き、今後の発展を企図するためには「多くの日本人が、『スポーツとは何か?』という問いに対する回答を共有する必要がある」と言いながら、『『スポーツとは何か?』という命題に対する回答としては、『スポーツ学者の数だけある』といわれるくらい数多く存在する」と述べ、著者も含めて6者の定義を紹介して終わっている。回答を共有する必要があると言いつつ、回答は人の数だけあるというのだから、矛盾しているように読める。したがって、受験生は、この逆説を解きほぐし、それに基づいて「考えとその理由」を述べなければならない。

「共有」から考えるとわかりやすい。考えを共有するためには、抽象化する必要がある。よいアイデアも、具体的すぎると共有できないが、抽象化すれば共有できる。たとえば、「ゴールキックの精度をあげるには五郎丸ポーズが有効」は一部の人がしか共有できないが、「精神集中にはルーティンが有効」なら、多くの人が共有できる。だから、まず、6つの定義を抽象化して、共有可能な定義にまとめる(=帰納)。

詳述は避けるが、6者の定義の差異は、「エネルギー消費」「非暴力表象」「美の増大」など、具体的な目的の違いである。逆に、6者が依拠しているのは、するの観るの目的になる点である。つまり、スポーツについて、生き残る抽象的な定義は「行為そのものが目的となる行為」である。だからこそ、副次的な目的を無限に派生させられる。勝負のため、記録のため、交流のため…。あとは、君の意見を述べればよい。

行為そのものが目的となる行為

回りくどかったけれど、勉強や芸術にも同じ側面がある。

^{みやだ}宮台真司は、前回触れた「感染動機」を説明するくだりで次のように述べている。

…スゴイ人に「感染」して何かをしている時間が、すべて喜びの時間——瞬間じゃない——になるんだ。
だから「感染動機」が最も強い「内発性」をあたえる。「内発性」とは内側からわき上がる力だ。「自発性」と比べるといい。損得勘定で「何か」をするとき、別に誰に強制されてはいないけれど、その「何か」自体が喜びなわけじゃない。これが「自発性」だ。
喜びの時間を目指して「何か」をする場合も、それは同じだ。だから「競争動機」も「理解動機」も「自発性」に基づく。「感染動機」は違う。「感染」している限り、「何か」自体が喜びになる。やることなすことが喜びだ。これこそが「内発性」なんだ。

宮台真司『14歳からの社会学—これからの社会を生きる君に—』(ちくま文庫、2013) 141~2頁

「内発性」がキーワードであり、「自発性」とも区別している。「感染動機」のすごさは、その行為を「行為そのものが目的となる行為」にしてしまうことである。だから、最も強い内発性をあたえる。勉強もスポーツも芸術も、そういう本質を共有している。

物事の本質は、極限的な状態において、輪郭をより鮮明にする。

すぐに想起されるのは、V・E・フランクルの『夜と霧』（みすず書房、霜山徳爾訳、1956年、〔新版〕池田香代子訳、2002年）である。収容所の過酷な生活に耐えるとき、ユーモアや芸術を忘れない感覚が有効であったという。

勉強や教育に焦点を絞れば、山崎正和の「もうひとつの学校」（『文明の構図』文藝春秋、1997）を思い出す。彼は、教育について考えるとき、「敗戦後の満州の中学校の暗い仮設教室の光景」が目には浮かぶという。

外は零下二十度におよぶ日もあるなかで、倉庫を改造した校舎には満足に窓ガラスもなく、寄せ集めの机と椅子のほかには教室らしい設備はなにもなかった。すでに日本人の故国への引き揚げが進んでいて、生徒の数は日に減っていたし、教師のなかにも、教員免許を持たない技術者や大学教授が混じっていた。なによりも、それは「瀋陽中学校」と名づけられていたものの、日本はもちろん、どの国の制度にもよらない純粋な私学校であった。中国政府に残留協力を命じられた日本人が、もっぱら親から子へ、人間が人間であるために必要な知識と文化をできる限り伝えようと開いた学校であった。

教科書は戦前の古本があったが、教師には教授法も指導要領もなく、授業はまったくの無手勝流で行われた。一年生がキングズ・クラウン・リーダーの三巻を教わったり、数時間をかけてマルティン・ルターへの伝記だけを聞かされたりした。中国語の授業はあっても漢文という教科はなかったから、「少年易老学難成、一寸光陰不可輕」という詩句を、私はまず中国音で習ってしまいに覚えている。ある冬の午後、ひとりの教師が古い手回し蓄音機を持ってきて、音楽といえば小学唱歌しか知らない少年たちに、西洋音楽のレコードを聴かせてくれた。掠れがちに針の下から響くラヴェルの『水の戯れ』と、ドヴォルザークの『新世界』に耳を傾けながら、私はどこか遠い世界に、そのときは名も知らぬ芸術というものの存在を感じ取っていた。

山崎正和「もうひとつの学校」（『文明の構図』文藝春秋、1997）81～2頁

残留を命じられた敗戦直後の満州。山崎は、生徒として参加していた。教室の外には「人間を野獣に返すような野蛮が広がっていた。文化は個人としての教師の内面にだけあって、それを伝えようとする努力には、ほとんど死にもの狂いの動機が秘められていた。なにかを教えなければ、目の前の少年たちは人間の尊厳を失うだろうし、文化としての日本人の系譜が息絶えるだろう。そう思ったおとなたちは、ただ自分ひとりの権威において、知る限りのすべてを語り継がないではいられなかった」という。

文化や芸術の継承伝達も、「行為そのものが目的となる行為」であることがわかるだろう。君たちが手に入れようとする知識や文化は、そのようにして守られ、そのようにして守りつづけられるべきものである。

受験する君へ **ラグビーか医学部か 決断** ラグビーW杯日本代表 **福岡堅樹**さん(23)

開業医の祖父の影響で医学部に行きたいと思っていました。国立大の医学部を考えていたので、強いラグビー部のある筑波大を目指しました。でも、花園（全国高校ラグビー大会）が決まった3年生の秋の時点で現役の合格は諦めていました。

1浪し、大学入試センター試験後に出願する国立大の2次試験で、前期は筑波大の医学群にしましたが、後期ですごく悩みました。予備校の先生からは「筑波にこだわらなければ、ほかの国立大の医学部は大丈夫」と言われていました。

心の中にあったのは「一番、後悔しない道を選ぼう」ということ。最も後悔すると思ったのがラグビーを捨てる選択だったので、筑波以外の大学は消えました。次に「2浪してしまったら」。2年間、体を動かさないと、第一線でプレーする体に戻すのは難しい。後期は医学群ではなく情報学群に決め、入学しました。

2019年のワールドカップ、20年の東京オリンピックまでラグビーに集中し、その後は勉強し直してスポーツ整形の医師を目指します。受験生にも、後悔しない選択をしてほしい。考えて選んだ結果なら納得がいく。難しい道でも、挑戦し続けてほしいと思います。

（「朝日新聞」2016年2月2日朝刊 聞き手・丹治翔）

*朝日新聞デジタル版連載「受験する君へ」の要約記事。インターネットで全文公開（無料）している。「受験する君へ」で検索。